

# BLANGEL

輪になりて踊る愚者の夜

---

夜士郎

原作・挿絵／渡瀬行人



あとみっく文庫／PDF立ち読み版



# CHARACTERS

アリシア・ブランシエル

ヴァンパイアに襲われ不老不死となった少女。月の光で覚醒する。

リオラ

アリシアのパートナーを務める彼女の眷属。戦闘能力は高い。

ジェシカ・クライシス

特査所属。優れた身体能力と動体視力を持つ。

幼い少女。アリシアにその命を助けられる。

ジェノバ・クライシス

ジェシカの姉。特査の武器開発や医療研究担当。

かみしろ  
神代あやか

日本刀で何でも切り刻むのが趣味。

いとぎりしずか  
糸切静香

バラト

魔獣の血を引く獣族。凄まじい性欲の持ち主。



【CONTENTS】

半序 文	.....	007
半第一章	<small>かいこう</small> 闇の邂逅	..... 013
半第二章	茜色の街	..... 057
半第三章	雌豹の罠	..... 078
半第四章	<small>なぶ</small> 子鹿罠り	..... 134
半第五章	<small>うた</small> 戦いの詩	..... 171
半第六章	<small>こどく</small> 蠱毒	..... 220
半終章	.....	293

BLANGEL

輪になりて踊る愚者の夜

殺してやると——明確な殺意を込めて、ギィを睨みつける。

ひい、と小さく悲鳴を上げて、後ずさるギィ。けれど、子供を盾に取っていることを思い出し、卑屈な笑みをその顔に浮かべる。

「けえっ。そうやって元気でいられるのも今のうちだ……くひ、ひひひ……」

耳障りな声で笑い、ギィは指先をこちらに突きつける。——と。その爪の間から、何かが這い出して伸びてきた。白く細い、神経のような肉の糸。

「ひ、ひ、すぐに、まともじゃあいられなくしてやるよ……」

肉糸は長く伸び、リオラの乳肉に絡みつく。さわさわと、あえかな刺激に晒されて、ぴくんと跳ねる敏感真珠。糸は何かを探るように、美乳の表面を撫で、さすり、乳頭突起にまで到達する。

「くふう……」

と、熱い吐息を漏らすリオラ。不意にその頤が、ぴくんと跳ね上がった。

「あうあつ……、くっ！ な、何をつ……」

糸の先が、なんと乳頭の先に開く小さな穴に侵入し、その内部を弄くり出したのだ。今までに感じたこともない、奇妙な感覚であった。

何かに触れられることなどあるはずもない肉実の中をじくじくと浸食する糸が、細い乳腺内を通過するたびに、痺れるような肉悦が全身に広がる。

乳肉の中を縦横に駆け抜ける乳神経は敏感すぎるほど敏感で、そんな場所におぞましい触手を擦りつけられてはたまったものではない。

「は、ああっ！ くあっ、ひくうっ！ そんなっ……、胸の、中なんてっ……」

リオラの端整な顔が恥辱に歪む。快楽を得始めた己が身体を戒める。

黒革に包まれたまん丸いヒップが、ふるふると震えて。豊乳が、火照っていく。異物を呑み込んだ乳肉はばんばんに膨れて、まるで中に母乳が詰まっているかのようだ。

その巨大な桃房がひとりでに、ぐねぐねと、奇妙に歪み、ひしゃげる様は、透明な指に弄ばれているかのよう。中で暴れる肉糸の、その淫らな動きを露わにしているのだ。

（ううっ……、こんな、こんなことで、私がつ……、折れるものか……）

きゅうつと、眉根を寄せ、リオラは懊悩する。

脳髓に押し寄せる白い波。乳肉に刺激が駆け抜けるたびに、腰がひくんとわなないて、腹腔の中で蕩けるシチューを肉股から零してしまいたいそうになる。

「ぐう、う、く、はあ、あ……、あ、あああああああっ！」

ギィの舌尖が、肉糸の埋没した乳頭をざらりと舐める。獣のヤスリじみた舌が、敏感突起を削り取るような刺激を与え、ぬるりとした唾液が生臭く染みこんでいく。

じゅぶっ！ じゅぶうっ！ じゅううううううっ！

「あ、ああっ！ 舐めるなっ！ 糸が、糸が入っているのにつ……、くああああっ！」

リオラの制止にかかわらず執拗に愛撫される桜の蕾。熱く煮える膨らみの奥で、滾る血脈がどくどくと脈打つのを感ずる。高まる性感、舌の感觸が倍加され、脳を灼くほどの乳悦が子宮まで響く。ねとりとした汗が、身体中から溢れ出す――。

肌にぴちりとはりついたボディースーツの中で、魅惑的なボディが悶絶する。

異様に膨れ上がる情欲と性感。理性を蕩かすほどに。

「き、貴様、これはっ……、な、何をしたっ……」

赤い唇から零れる甘い涎、潤んでいく瞳は熱い。

「ひひひひひひ。言つたらう、まともじゃいられないってなあ！」

楽しそうに嗤うギイが、指先で乳豆を弾く。その瞬間、落雷を受けたかの如き凄まじい快楽に全身が叩きのめされた。

「~~~~~っ！ あ、あくあああああああああああつ！」

腰をがくと浮かせて、リオラは仰け反つた。

（……な、何、こんなに、感じてしまうだなんてっ……）

ひゅうひゅうと、喉奥から荒い息を吐く。

そこに混じる、甘く切ない何かを聞き取つたのか、バラトがくつくつとせせら笑う。屈辱に、下唇を噛む。怒りに全身が熱を持つ。被験体を相手に、なんて無様な――。子供達の目が、痛い。見ないで欲しい、せめて、目を閉じていて欲しい。

重たげな肉の實の表面は汗にまみれ、ギイがそれを美味しそうに舐め上げていく。

(つ……、あ、ふあつ……、ぴりぴりとつ……、くふうんつ……)

ただそれだけで、腰から跳ね上がる肢体を抑えようがない。あまりに異常な性感の変化であった。まるで乳房を内部から造り替えられてしまったかのようなのだ。

「どうだ？ 気持ちよくて、たまらんだらう？ 俺の糸は、快楽神経を何倍もの感度に高めてやることができるんだよ。なあ、言えよ。気持ちいいってよおおおおお」

(……この……下衆が……)

下唇を噛み、声を押し殺す。この畜生に増長されるのは我慢がならない。

だがそれでも、荒々しく肉メロンを握られ、強く揉みしだかれてしまうと、喉奥から迸る淫苦の産声を抑えきれないのだ。

「ぐううっ、き、きついっ、そんなに、弄らないでっ……！」

人のそれとは比較にならない獣の握力に、柔肉は哀れに歪み潰され、鋭利な爪が肉に食い込んで駆け抜ける、その痛みにすら快楽を覚えてしまう。おぞましい舌に美乳の全てを舐め回されて、腐汁がまるで母ミルクのように丸い肉玉から滴り落ちる。

妖しくうねくる、狩人の黒い肉体――。

「くああっ、ふ、ふくううっ……、あ、くあああっ、くは、っ、おおっ……」

頭の中がどろどろと溶けていく。快感の波が思考を打ち消す。



朱に染まる美貌は淫蕩に歪み、眉間に皺しわがきゅつと集まる。

「はあ……、ああ、私が、こんなことでは……つ、くひい、はう……つ！」

「——は。いい声になつてきたじゃねえか」

熟れた果実への辱獄に悶える狩人を見て、バラトの声は愉たのしげであつた。

「誰が……、このようなもの、私は何も感じていませんっ……」

瞳を潤ませ、官能の熱を全身に燻くもらせて、汗にまみれた後おれ毛を首元にはりつけ、それでもバラトに向ける視線はあくまで刃のそれであつた。

「へえ、そうか。ならよ？」

と、不意にリオラの手足が解放された。身体が即座に臨戦態勢を取るのは、快楽に囚われていれどハンターたるリオラの強さが故である。だが、動けない。バラトが、その手の平の中に子供の頭を握りしめているのを目にしては——。

「ギィ、少し離れてろ。リオラよ、そこで自分の胸を慰なぐさめろ。公開オナニーショーだ」

「なっ……！ き、貴様、どこまでっ……」

——人を愚弄すれば気が済むのか——！

思わず攻撃の一步を踏み出そうとしたリオラへと、

「ああ？ もう子供はどうなつてもいいから私を解放しろ？ しょうがねえなあ」

そう言つてバラトはほんの少しだけ腕に力を込めるのだ。それだけで、子供は喉がひしゃ

げたような苦鳴を放ち、口の端から泡を吹いて悶絶する――。

「……！ ま、待ちなさい！ わかった、やる、やりますっ……」

制止がわずかに遅れれば、子供の命はなかっただろう。手を緩め、頬肉を吊り上げるバ  
ラトを悔しげに睨みつけ、リオラはおずおずと、自らの乳房に指を伸ばす――。

（くっ、こ、このような、はずかしめをつ……、あ、ああつ……！）

「……っ、く、ひいんっ……」

ほんの少し指先が触れただけで、びりりと電流が駆け抜ける。

ボディスーツの大きく開いた背中が、さざ波のように震えた。

右と左の両腕で、両の乳房を包み込み、全体をゆつくりと揉み始める。柔らかな情欲の  
波が全身に広がって、喉の奥からせり上がる甘い声。

「ん……、ふ、う……、くっっ」

きゅっ唇を噛みしめて、必死で抑え込む。

（ああ……見ている、見られているっ、被験体に……子供らにっ……！）

彼らの目は一樣に哀切で、リオラが何をしているのかわかっていないのかも知れない。  
そんな無垢な視線を向けられて、それでも感じてしまう身体が恥ずかしい。

（く、うう……、見てはいけない、見てはっ……、は、ああ……）

蜜のような唾液が口中に溢れる。それを飲み下し、リオラは強めに胸を揉む。

「んっ……、くうっ、は、ああっ……!!」

「ほらほら、もっと濃厚に見せてくれよ。なあ、おい?」

バラトの、子供を抱えた腕の筋肉が盛り上がる。それを見せつけられては否も応もなく、双乳を揉み上げ、擦り合わせ、肉豆の先端を押しつけ合う。

涎でびちよびちよの乳突起が、擦れ合い、絡み合い、すると、粘っこい水音がいやらしく響き渡ってそれだけで頭の中がかあつとなる。

敏感すぎる乳房はむずむずと疼いて、にちゆるにりゆるとゴム毬のような肉玉をこねると、ぞくんと背筋を這う官能の虫に豊尻がきゅっとうと締まり上がり、股間からは熱いジュースをとろりと垂らしてしまうのだ。

「は、ふああっ、ん、んくううっ……、は、ん、んんっ……」

(流されては……、駄目、耐え……ろ、んっ……)

眉間に皺を寄せたまま、ふるふると首を振る。

汗にまみれていく肉体に、びたりとはりつく疊惑の鬨衣。みずみず瑞々しい肢体を申し訳程度に覆う黒革の内で、官能に悶える肉体が蛇のように蠢いている。

——乳悦に悶える熟した身体は、甘い蜜で雄を引き寄せる毒花のようだ。

長い黒髪をゆらゆらと、揺らして悶えるリオラへ注がれる魔物の目も危険な光を帯びて、間抜けに開いた口からは涎を垂らさんばかりである。内股をきらきらと流れ落ちる愛液が、

濃い雌の匂いを漂わせ、それが人ならぬ彼らの強力な嗅覚を刺激してしまうのだ。

もはや仇<sup>あだ</sup>など眼中になく、憎しみよりも色欲に支配された目でリオラを視姦するギイ。バラトの猛り狂った男根に、めきりめきりと青黒い血管が浮かび上がり、馬のそれよりなお巨大なペニスの先端から透明汁を垂れ流している。

カウパー腺液の獣じみた精臭がリオラに届く。雄の匂いが脳を直撃する。

敏感すぎる乳肉の悦楽に全身が蕩けるようだ。びく、びく！ と愛撫に合わせて股が跳ね、子宮が熱く燃えあがる。

(は、ううあつ、い、イっ、く……、こんな奴らの、目の……前でっ！)

ギイが、バラトが——子供達が見ている。

自慰アクメに到達する私の姿が見られている——。

「——だめ、見ては……なりませんっ、だ、だめっ、はあっ、く、あっくくく!!」  
びくびくっ！ びくびくびくっ！

腰を、膝を打ち震わせる。絶頂に達した身体を小さく小さく震わせて、ぎゅっと目を瞑り、ただひたすらに官能の波に翻弄される身体が落ち着くのを待つ。

どっと、生温い汗が全身から噴き出して、艶めかしい肢体を濡らしていた。

「はあ……、はあ……、ああ……、あ……」

(く……う……、イってしまっったっ……なんという……)

がくと膝が落ちて、その場にへたり込むリオラ。そこに、黒い影が立ちはだかった。バラトである。獣欲の滲む瞳が、リオラをとらえていた。

「いや、なかなか刺激的なショーだったなあ。俺のも、こんなになっちゃった」と——リオラの目の前に、凶器に等しい男根が突きつけられる。

「……何をすればいいのですか」

「そうだなあ。まずはそのでかい胸で挟んでくれや」

にいと笑み歪むバラトの顔を見据えて、リオラの指が、巨大な肉棒に触れる。両手の指で輪を作ってもなお収まりきれぬ、巨大な肉の槍。表面に筋張った血管が、どくどくと脈動する様子がまるでその器官だけが別の生き物のようで不気味である。その芋虫のような肉塊に、自らの肉球をぐつと寄せて、嫌々ながら挟み込む。

「あつ……、く、うくううつ……」

敏感に弄くられた乳房の快楽神経は、その行為だけで甘い陶酔を伝えてくる。

まるで大きな白パンに挟まれた極太のウインナーのようだ。

男根の熱さが、乳神経を通して伝わってきて、それがたまらなく不快であった。

肉玉乳房に収まりきれない男根は鼻面まで届いていて、その先端からぷうんと放たれる強烈な精臭に吐き気を催す。何日も洗っていないのではないだろうか、ひたすらに女とまぐわい続けたバラトの肉根は、獣の匂いそのものの腐汁に満ちて、鼻孔の奥に突き刺さる

ほどの悪臭をリオラの山乳に染みつかせるのだ。

(く、うう……、こんな、なんて、穢らわしいっ……)

嫌悪感に顔を背けるリオラ。だが、バラトは容赦なく、

「おいおい。まさか挟んだだけで終わりじゃねえだろ？ ……しゃぶれよ」

白い美貌を肉根で突きながらそう指示する。軋みを上げて、リオラの首が男根と相対する。たまたぬ生理的嫌悪であった。理性で抑制できるものではなかった。

「う、ぐうう……、ううう……」

くしゃくしゃに顔をしかめて、リオラは唇を近づける。

(被験体の……被験体の、モノなどをつ……！)

紅く柔らかな唇が、精一杯に開かれる。生暖かな肉洞の奥から、桃色の舌が怯える小動物のように這い出してくる。目の前の、巨大な肉の蛇にご奉仕を行うために。

に、っ……、ちゅ、ちゅば、ちゅ、じゅ、ぺろっ……。

舌尖を当てた瞬間、諦観ていかんにも似た暗い何かが襲いかかってくる。

子供達を前に私は、こんな街中で、それも魔物を相手にそのペニスを舐めている——越えてはならぬ、墮落の一線を越えてしまったかのような、そんな気持ちに支配される。

「ふっ……、にちゅ、じゅるう、に、匂い——が、……い、あああっ……」

——機を得るためだ。自棄やけになるわけにはいかないのだ——。



こめかみがびくびくと痙攣する。額に大量の脂汗が浮き出す。すでにS字結腸を通り過ぎた肉塊が、腸管を満たし、重みを増す下腹部が重力に引かれ垂れ下がる、けれど肉塊はなお臓腑の奥へ奥へと潜り込んでくるのである——。うぞうぞ、うぞうぞと。

髪が逆立つ。気持ち悪い、気持ち悪い……！ 止めて、止めて……！

と。まるでその意志が通じたかのように、肉塊がその歩みを止めた。

「——、は、ああ、はあ、はあ……く、う、お腹がばんばんで……ひっ！」

そして——身体中に巻き起こる爆発的な悪寒に、身震いする。

蠢く肉塊は小腸をすら満たし、少女の腹を妊婦のそれへと膨らませ——一斉に、逆流を始めたのだ。

ぞぶるぞぶるぞぶるぞぶるぞぶるぞぶるぞぶるぞぶるぞぶる……！

「あひい、いいいいあああああああつ！ 出るうう、出るううあああつ！」

背筋を貫く熱い波、ぎゅるぎゅると臓腑を鳴らして吐き出される大量の肉スライム。ぐぱりと開ききったアナルから迸るそれが放射線を描き床を打つ。ひくひくと震える子尻から噴き出す肉塊はとめどなく、たまらない解放感がジェシカの総身に満ちてゆく——。

——それは禁忌の快楽であった。

「やめ、やめ、そんな一気になんて……！ 駄目、駄目つ、あひやあああんつ」

腸壁が擦られ肛門が捲れ返る。排泄によつてもたらされる爆発的なその快感は、人間に



とって抗えぬ原初のそれであった。ぴくぴくつ、びくびくびくつ！ 何度も何度も小さく跳ねるジェシカの細腰、伸び上がる背筋、足の指先まで張り、涎を垂らして、小さな身体の中で吹き荒れる排泄快楽に酔いしれる――。

「出、出るう、いっぱい、出てるっ……、あ、あああ~~~~！」

ぞくぞくぞくと怖気に震え、毛穴という毛穴が開かれる。頭の中がちかちかと明滅し、意識が白んでいく。どろどろに溶けてなくなってしまうこの身体。どぶどぶと、股ぐらからは尿と見間違わんばかりの愛液を垂れ流し、甘い湯気を立ち昇らせていた。

「は……、ぐ、ひい、……あ、ふううあ……！」

（何、なんでえっ……こんなのが、気持ちいいなんてっ……！）

肛門から粘液を噴出して、それに快楽すら感じて――凄まじい恥辱であった。

にやにやと、被験体の、見下すような視線。せめてもとそれを睨みつけようとして。

「~~~~~！ あ、あぐああつ！ また、また這入ってきたああああつ！」

再度ジェシカの内に沈み込んでいく腐肉の塊に、高らかと嬌声を放つ――。

満タンに膨張する腸壁はすり減ったタイヤのように破裂寸前。呻き、涙を流し、狂乱の態で首を振るジェシカ。菊肉は奥の奥までドロドロで、括約筋は流れ込む肉スライムに対しあくまで無抵抗であった。

（そんな、そんなっ！ こんなに、またこんなにいっぱい……！）

再び膨らみ始めるジェシカの下腹部。じりじりと、脳髓を焦がす圧迫感に脂汗が滲み出る。お腹の中はもう満腹で、苦しくて苦しくて……。栗毛の髪を振り乱し、縛られた脚をばたつかせ、苦悶と恥辱とに淫らなダンスを踊ってしまふ。

そしてまた、あるところで肉の侵入は止まるのだ。

(また、さつきみたいにな？ ……、一気に、出ちゃうのっ……)

蘇る排泄快楽に、背筋に甘い電流が駆け抜ける。喉がからからで、舌を出して喘ぐ。

(う、ううう……、出ない、出ないっ……、まだ、まだ出ないのっ……)

ゆるゆるとお尻を振るジェシカの身体は、排泄への期待に満ちあふれていた。ただひたすらに、腹腔を焦がす拡張苦悶から逃れたい一心であった。

「あつ……、うい、……出て、出して、出してっ……！ 出してようっ……！」

気が狂いそうな充溢感に、子宮は炙られ、とろとろと股間のクレパスから輝く愛液を溢れさせる。排泄の気持ちよさを知ってしまった肉体は、羞恥を覚えるほどに淫らな欲求に打ち震え、幼い肛門をひくつかせてさえ垂れ流しがっているのだ。

(何……、なんなのっ、身体が、熱いっ……、熱いっ……)

お腹の下で焚き火でもされているみたいに、下腹部から広がる熱感が全身を包み込む。大量の汗が背筋に溜まり、背筋へと落ちてうっすらと浮かぶ肋骨に流れてゆく。甘く痺れる肛門肉が、鯉の口のようにくばくばと開閉している――。

「出したい、出したい、出したいっ！ お願ひ、だからっ——！」

ぶびゅっ！ ぴゅぴゅっ！ と、間拔けな音を立てて、アヌスから透明な粘汁が噴き出した。存外に部屋の中に響いた、その空気の漏れるような音に、ジェシカの総身は恥ずかしさで震え、赤らむ内股を擦り寄せればぐちゅると淫靡な粘着音が弾けてしまうのだ。

「ひ、ひひ！ ひひひっ……！」「かかっか、かかっ……」

嘲笑が、鐘の音のように頭蓋の中で反響する。恥辱に抉られるジェシカの心——それが、砂山のように崩れていく。

「ひっ、……く、う、あああっ……姉さんっ、助けて、姉さんっ……」

そしてとうとう、彼女は救いを求めてしまう。薄暗がり広がるだけの狭苦しい部屋の中で、ハウンドたる誇りを見失い、助けなどあるはずもないその場所で——。

「ひき、ひききききっ！ 助けて、だつてえ。情けなァい。きひひひひひ——」  
嬉しそうに、愉しそうに、ばんばんと手を打つ糸切。

怒り、屈辱、恥辱——あらゆる感情がない交ぜとなつて少女の心を打ち据える。

私はハウンドなのだと——そう、思いこもうとしても、腹腔の内部を満たす肉塊が、腸の中でうねくるとそれだけで、爆発的な逼迫感ひっぱくが心など吹き飛ばしてしまう。

「出て、出てっ……、出てよ、出てよおおっ！ あ、んふうっ、中で、中でなんてえっ、動かないでえっ！ んぐううう、お、ふあああああっ」

無理矢理に排泄しようといきんでみても、腸壁にしがみつくと肉塊を吐き出すことは叶わない。犬のように舌を吐き、熱い息を荒げ、朱色の頬は汗まみれ。

「さあ、どう？ 何か喋る気になった？」

と、糸切に問われる。何か、なんでもいい、情報を漏らせば、この地獄から解放してくれるのか。みつともなくて、無様で、醜態を晒し尽くしたこの有様から――。

「……息が血生臭いのよ。あまり顔を近づけないでくれる？」

引きつる口の端を無理矢理に引き上げて、笑みを形作るジェシカ。

果たして、糸切は――その返答に、偏執的な笑みをなお深くして、愉快げであった。

「グッド。いい答えだわ……。あつちは口を割りそうにないからねえ」

と糸切が目線で指す先には、身悶えるアリシアの小さな身体がある。

「くっ……、じ、ジェシカっ……、あうっ！ ひああっ！ く、ぐうううあっ」

ジェシカよりも小柄なアリシアの肉体は、いまや悦楽に沈んでしまおうとしていた。腐汁に濡れそぼる全身にワンピースの布地がびたりとはりついて、その華奢な身体を浮かび上がらせている。あちこちが裂けた黒い布地は、その下の雪の如き肌を痛々しいほどに映えさせる。埃まみれの床に金色の髪を擦りつけて、芋虫のように悶えるその姿には、あの小生意気な少女の面影もなく――そこに、まざまざと浮かび上がるメスの表情。

けれど、彼女ははまだ、誰にも救いを求めてはいないのだ。それなのに、私は。

「だから、もうちよつと貴方を気持ちよくさせてあげてね」  
糸切の、嗜虐の悦びに満ちた瞳に、怯えてしまう。

と。急に、お腹の奥で、肉塊が暴れ始める——!

「——! つ、んひい、はう……、あつ、……、あ、ああああああああつ!」

内臓が押し潰され、膨れ上がった腹の皮がぐねぐねと蠢く。熱い石を肛門の中に突っ込まれたような熱い苦悶に腸粘膜が焦がされる。汗まみれのお尻を高々と掲げて、裏の洞でうねくる怪物の蹂躪を、ただひらすらに堪え忍ぶ——。

「く、ひほおつ! あ、ぐああつ、ふう——、うぐう、ぐうううああつ!」

(破れる、破れるつ! お腹が、破れちゃううううつ!)

ぱんぱんに張った腹部が、上下左右にうねくり動く様は異様であった。肛門の内肉が、外部に捲れ返った様子はラッパのようだ。

——もう頭の中はぐちゃぐちゃでわけがわからない。壊れる、お尻の穴も、私の頭の中も、何もかも壊れてしまう——子宮はひり潰され陰唇からどろどろと被虐の涙を流し、小さな胸の膨らみを汚れた床に擦りつけて狩人は啜り泣く。

強烈すぎる肛肉拷問に限界を迎えていく少女の排泄器官。

そして、いよいよ待ち望んだ刻が訪れた。

肉塊が一切の抵抗をやめたのだ。排泄圧力が臓腑をずんと打ちのめし、ぐぱあと開ききつ

たアナルへと、怒濤の如く奔流する肉塊——！

ジェシカの全身が、歓喜に打ち震えた。——その時。

糸切の刀の鞘が即座にアヌスに突き立てられる——！

ズボオオオオオオオオ！

「っ……！！ あ、アアアアあああああああつ！ ひぐううあああつ！」

突如として出現した直腸をみちりと塞ぐ蓋に、絶望の悲鳴を放つジェシカ。

灼けた火箸を突っ込まれたような耐えがたい苦痛。それに何よりも、排泄を阻害されたことによる全身への揺り返しの苦悶が、電流の如く身体中を責め苛む。

「……あ、あおつ！ く、ひい。はほおおおつ！」

「……！！ じ、ジェシつ、んうう、ぶううつ！」

アリシアの呼び声も肉に埋められ途絶えた。黒いパンプスから汗に濡れたニーソックスからぐちゃぐちゃに汚れたワンピースから、もう全身を肉襦袢にくじゅばんに包まれてしまつて、さらに口の中まで肉塊に塞がれて満足に息もできていないのだ。

（アリ——アリシ——、あ、ああつ……、誰かあつ……）

「ふぐううう、あおおおあ、っ、はあつ、く、苦しつ……、んあううつ！」

「ほらほら。どおお？ こんなのはっ」

泣き喚くジェシカへと追い打ちをかけるように、糸切が鞘を弄ぶ。ぐりぐり、ぐりぐり

と直腸内をこね回されて、引きつるように跳ね回る細腰。

「ひいぐうっ！ やめ、動か……しちや、や、お、ひいん、は、ん、んひいっ！」

肉塊とは比べものにならない、硬い異物感が肉粘膜を抉り上げる。みちりと埋まった肛門が右へ左へ引きつって、アヌスと鞘の狭間からじゅぷじゅぷと腸汁を噴き出す。

ぐじゅ！ じゅ！ ぐりっ、ぐりぐりっ！ 繊細な腸壁をまるで気にすることなく、手慰みに弄ぶ糸切の鞘はまるで鍋の中身を掻き回すかの如くだ。

鞘の角で腸壁をがりぐりと削られて、「ひうっ」と腰が跳ね上がる。

「はいはい。どこか痒いところはございませんか〜」

ふざけたように言いながら、その手を休めることはしてくれない。

「あ、ぐ、手を、止め、止めっ……、ひやぐ、ひやぐうっ……あ、あああ〜」

ジェシカの懇願がうるさいと、鞘を激しく出し入れする糸切。ずぶずぶっ！ じゅぶじゅぶっ！ 腸液の放つ粘着音が尻肉の狭間でしぶき、にちゃりにちゃりと粘膜を混ぜくる音と相まって、淫らな音楽を奏でていた。

にちゆるっ！ ずぼ、じゅぼぼっ！ にちや、ぐっちゅ、ぐちゅゆるっ！

「ふひっ……、く、ひいっ……、硬いっ、硬いっ、お腹、破れちゃうっ……」

何よりも、それが子宮の裏側を直接的に擦り上げるのがたまらない。ただでさえ、脳髓を焦がすような排泄快楽を感じさせられて、強烈なおあずけを喰らっているジェシカ的身

体は、いまや墜壁まで響く鞞の陵辱にすら悦楽を感じてしまうのだ。

「あ、ふはっ、くあっ……、あ、ん、あんっ、ん、んっ、んんんん〜〜〜」  
鞞を動かす糸切の手と合わせるように、喉奥から漏れる声は驚くほどに甘い。

二重奏である。アリシアの、あえかな喘ぎが、それに重なる。

「んっ、ああっ、もうっ、おひりはっ、おひりはやめよっ、は、ああっ！」

じゅぶりじゅぶり執拗に幼い肉孔を責め立てられて、金色の髪を振り乱している。

二人揃って、排泄穴を嬲られて。それにはしたない声を放って——。

(こっ、こんなのっ……、私は——負けたくないっ……、ぐ、うううっ)

恥ずかしさに下唇を噛んで声を押し殺そうとしても、肉皺に潜り込む異物をぐりと捻られるとお尻が勝手に跳ねてしまい、硬い鞞を直腸の奥へと自ら抉り込ませてしまうのだ。

「ひきやんっ！ だめえ……なに、なんなの、この感じっ……」

また、子宮の裏側をがりごとりと削られて、頭の中がふわふわと蕩ける。

蠢く官能が背筋をぞくりと粟立たせ、花唇から蜜汁がじゅわあと湧き出す。

徐々に絶頂へと追いやられていく少女の尻肉は、鞞を握って離そうともしない。

「きひやひや。欲張りねええ」

くぐもったように笑う女が、両手で鞞を握りしめると、激しく上下に揺り動かした。  
ぐぼ、ぐぼぐぼぐぼ！ ぐじゅる、ぐぼ、じゅぼる、ぐじゅるぼおっ！





「わ……我、は……」

かつて、身の毛もよだつ玩具に貫かれた身体。淫魔と罵られせられて、けれど不死の肉体はその全てを甘受した。のたうつ肉体、快樂によりがり狂う脳髓——。忘れ得ぬ、煉獄の檻。淫魔。淫魔。淫魔めが——！

「否……、我は、違うつ！ 我は、我は……」

「ううん、違わないよ、お姉ちゃん。今からそれを、思い知らせてあげる——」  
そう言つて、アリシアの股の間に膝を立てるあやか。その股間を見て——アリシアは目を剥いた。

そこには、あやかの小さすぎる身体にはあまりに不釣り合いな肉棒が、グロテスクに張り出していたのだ。赤黒く、びくびくと震えて、その先端からは先走りの汁を垂れ流している。太さは大人の腕ほどもあろうか、あまりに醜い腐肉の男根であった。

「なっ……、あ、あやかっ、それはっ……！！」

未成熟極まりないあやかの裸体にそびえるそれはあまりに非現実的で、けれどその先端がいまだ肉ヒルの埋まったままの膣口にあてがわれると、ぞおつと腹腔が凍りついた。

まさか、まさか、こんなものを——！

腐肉を掻き集めて造成された男根だろうに、どくどくと脈打つ血管が禍々しい。そんなものがあやかの股間に生えているのは、何かが致命的に間違っているような気がする。

「やめよ、やめっ……それは、それだけはっ……」

たまらずに懇願してしまうアリシアの両足が、丁度よい高さに吊り上げられる。

「さあ、おねえちゃん？　一緒に気持ちよくなるう……」

そう、あやかは笑って。

ごつごつとした剛直棒が、アリシアの未熟孔へと突き刺さる——！

「あ……、あ、ひ、あああああああああ……」

こじ開けられる膣口が、焼けつくようだ。途中で、潰されていく肉ヒルの感触が、ぞわりと脳髓を貫いた。

みきみき……みちりっ！　無理矢理に広げられていく蜜筒は、巨大すぎる肉棒に悲鳴を上げ、柔い膣壁が引き裂かれていく。

股関節が外れてしまいそうなほどに割り開かれ、舌を突き出し苦悶に喘ぐアリシアの唇からは泡混じりの涎がぶくぶくと垂れ流される。そして、肉棒の先端が、いよいよ輪っかになった処女膜を奥へと押し込んでいく——！

(……あ、ああ……また、また——我はっ……)

処女の薄肉が——押し込まれ。そして。

——ぴりいい、ぴりいっ！

「——！　う、破れ……、痛、あ、ああ……う」

それはさしたる抵抗を示すこともできず、裂け、引きちぎられた。

何度——何度味わつても慣れることなどけしてない、破瓜の苦痛に涙を流す。どんな痛みや苦しみよりも、それはなおアリシアの心を打ちのめすのだ。

「あはは。破れちゃった」

あやかの口調は軽いもので、その滑稽なほどに幼い腰をぐうと押し込めていく。ぐちりぐちりと処女門から向こうを蹂躪していく肉塊に膣道はみつちりと埋め尽くされ、なおその奥を侵略しようと抉り抜かれる。

あまりの苦痛と圧迫感に、呼吸すら満足にできない。

まるで身体そのものを二つに割り開かれているかのようだ。

「ふ、ああお……、や、やめえ……止めよ、ぐ、ひいぐいい……」

苦しみ悶え、己の内を蹂躪するそれを否定するように首を振つても、ほじくり返されるはらわたを救えるはずもなく。淫液迸る秘肉のトンネルはどうとう奥も奥、子宮底まで開通してしまふ。ズウンと、重苦しい衝撃が、内臓全てに響き渡った。

「あ……う、おお……、ふ、深い、深い……」

許容量を超えた暴肉に最奥までを引き裂かれ、ひくひくと陰核を痙攣させる。膨張しきつた膣道の圧迫感が脳を灼き、処女を破られた苦痛はじくじくと神経を責め苛む。

汗の滲むニーソックスは生白い肉肌を透かしてしまふほどだ。黒いパンプスがかくかく

と震え、捲られた黒いスカートには、汗と愛液とヒルの肉汁と——様々な体液が染みついてぐちよぐちよだ。

清楚なゴシックロリータのドレスは、いまや生臭い腐臭の染みついた雑巾と成り果てて、汚らしいベッドの上でかろうじてシーツの役割を負っているのみ。

「うぬ、……、ぐ、うう……、はああ……、ああ……」

声を押し殺し、少女は啜り泣く。身体の中を埋め尽くす、暴虐の肉塊に身も心も蹂躪されて。細い肩と大きなリボンをふるふると震わせて、アリシアは無残に広がりきった桜の花びらの痛みをひたすらに堪え忍ぶ。

「はあ……、あ、お姉ちゃんのなか、温かい……。吸血鬼なのに……」

夢見心地にそう告げる、あやか顔も朱く染まり、濡れた艶が浮かび上がる。

恐らくはその男根は、少女の快樂神経に繋がっているのだろう。あやかは、男の悅樂を感じているのだ。

「すごいようつ、きゆうきゆうって、締めつけて、きつきつで……。こんなの……」

と、アリシアの両足を掴んで支えにすると、ゆるゆると——股間を動かし始めた。ぬじゆる、ぬじゆると濡れ響く、粘ついた音が耳朶を打つ。

未成熟な肢体と肢体が——白肉絡ませ睦み合う。

「や、め……、あやか、まだ、まだ動かすな……、くあう、あうつ……」

ぴちぴちに広がりきつた肉孔は、僅かに動かされただけで脳が裏返るような痛みを響かせるのだ。乳房をふるりと震わせわななくアリシア。子宮の奥を何度も何度も小突かれて、子宮袋がずうんずうんと重苦しく震える。

「ぬっ、うう……、ふあ、あっ……、くい、はひいつつ！」

「くすくす、どんどん熱くなっていくよ？ お姉ちゃんの中、火傷しそう——」

耳元でそんな恥ずかしいことを囁かれて、恥ずかしさに身体中が白熱する。すると子宮の奥からはなお煮えたスープが迸り、あやかのそれへとぶちまけられるのだ。

「ふああっ！ あは、あはは、何、今の、……もう、ぐちゃぐちゃだあ、お姉ちゃん、熱くてぐつぐつしてて、気持ちいいよ、いいよお……」

「いやだ、言うでない、言うでないっ……そんな、そんなことっ……！」

激しく首を振り、耳奥に忍び入る声を振り払う。そうでないと、認めてしまいそうだからだ。——自分が、暗い悦楽を、感じ始めていることを——。

（うあ、身体が、熱い、……こんなことをされているのに、私の身体は……）

膣孔を深く抉り貫く肉棒が子宮口を、ドーナツ状の入り口をぐちゅぐちゅと叩くたび、膣肉がうねりを打ってペニスに絡みつく。

引かれると、アリシアの身体すら引きずる勢いで襲を逆しまに削られて、眼球の裏で火花が散り、ずんと突き入れられると、ヴァギナそのものが肉孔の中に引っ張り込まれてし

まう。

めじつ、じゅちゅつ！ じゅぼつ！ ぐつちゅ、ぐちゅちゅお、じゅぼおつ！

「ああ、いぎいいつ、は、ひいんつ、止め、激しつ……、くひいんつ！」

内臓まで挽き潰すようなストロークに、腹腔が煮え滾る。ぞわぞわと、苦悶と官能の刷毛で背筋を撫で上げられ、頭の中は白熱していく。

アリシアの小さなヒップがあやかの腰と仲良く揺れる。ペニスの前後運動に合わせて、散々弄くられた肛門がくぱくぱと、開いたり閉じたりを繰り返している。

「きついつ……はあ、んっ、い、いたつ……、は、ああつ、ふあああつ」

いつしか、身を引き裂くような激痛はあえかな鈍痛へと変わっていつて、そのかわりアリシアの内にこみ上げるのは、痺れを伴う毒のような快楽であった。

痛みはまだある、びりびりと、肉を灼くような痛みは。けれどその痛みの皮をつるりと一枚剥けばそこには浅ましいほどに快楽を求める雌の欲求が確かにあるのだ。

（ああ——気持ち、いいつ……、このようになつ……責めでつ……）

引き裂かれたドロワーズがゆらゆら揺れる。赤めく肌が艶めかしい。

薄い胸、平らなお腹、その幼い少女そのものの美裸身が、雌豚のように発情していく有様は、どこか淫靡で、背德的ですらあった。

「はげし、だ、だめだつ、そこつ、くひいつ、ふ、ふひいつ、んふああつ！」

「あ、ははっ！ お姉ちゃん、声、全然かわっちゃったねっ。ほら、二人もっ」

あやかの息も荒く甘く、その声に重なるように聞こえてくるのは、確かに快楽の響きを籠めた嬌声の二重奏である。

リオラも、ジェシカも、だからだと涎を垂らし、眉根を蕩かせて、総身を貫く肉触手の悦楽に溺れてしまっている――。

「おひり、おひりいっ！ や、はひいっ！ 気持ちっ……いいっ！」

肛門から内臓全てを蹂躪されて、けれどその声は甘く茹だつて匂い立つ。

ジェシカの、成長途上の肉体に絡みつく肉の触手。その張り出した骨盤も、引き締まった細腰も、手の平で隠れてしまうぐらいの乳房も何もかも、粘りまみれの肉触手に愛撫されて、少女は頤を反らし快楽にむせび泣く。

「やえ、やえてっ、またいく、おひりでイっっちゃうっ！ や、やへえええっ！」

言葉は意味をなくしていく、ガクガク震える身体は、すでに彼女が何度も小さなアクメに到達していると物語っている。瞳は上向き、口角は笑みの形に歪んでいる――。

「……っ、ぐう、ああっ！ ぐ、アリシアっ、ん、くううううんんんっ！」

リオラの股間にはもう十本を超える触手が配線のように伸びていて、その全てが彼女の中に埋没しているとは信じられない。もはや、前の穴と後ろの穴とが繋がってしまったのではないかと、それくらいに拡張された二穴からは、ぎちりぎちりと身の毛もよだつよう



な凄惨な肉音が鳴り響いている。

身悶えをするリオラの、胸元で大きく揺れる乳玉には幾重にも触手が絡みつく。余り肉がはみでる様はまるでボンレスハムのようなだ。

ぎゅう〜と、引きちぎってやるうかどばかり乳房を左右に吊り上げられる。乳房が赤く充血し、リオラの顔が苦悶に歪む——どっと、大量の汗が噴き出して、熟れた女の肉体を、生々しい雌の臭気で匂わせる。

「ふ、ぐあああああつ！ 千切れる、ぐうつ、千切れてしまうつ！ やめなさいつ、やめつ、は、んくうううつ、お、ぐああつ、は、はあああああああつ！」

高らかと口から漏れる悲鳴には、けれど確かな甘美に酔っている響きが混じっている。熟れきったたわわな果実を、こねられ潰され引かれ抉られ——。

「あおつ、ひあつ、やつ、感じる、感じすぎるつ！ く、うう、んきゅああああつ」

悶絶しよがり狂い、弓なりに反り返る肢体はひきつり、その股間からは大量の潮がぶしゅぶしゅと噴き出している——快楽に呑み込まれ、正常をなくしてゆく従者。

——皆。悦楽に呑み込まれていく。我も、また——。

「ね、みいんな気持ちよくなっているでしょうつ。だからアリシアも、もつともつと気持ちよくなるうようつ！」

はしやぐあやか股間で、その時変化が起こった。

「——っひ、あ、あやかっ、駄目じゃ、お、お尻はっ……！」

狼狽するアリシアの肛門に、あてがわれたのは新たに生まれた肉ベニス。

形成された二本目のペニスは、前を埋めるそれに勝るとも劣らない剛直であった。

亀頭先端がピンクの排泄口に狙いを定め、溢れ出す我慢汁が潤滑液にと皺肉に塗りたくられる。

「ああ、いやじゃ、やめ、お尻なんて、いやじゃ……」

怯え、哀切に髪を揺らすアリシア。

正体不明の肉塊の仕業などではない、ただ欲望のままに行われる排泄穴へのアナルセックス、尻孔への陵辱なのだ。

こみ上げる恥辱にきゅっとお尻の小窓を引き締めるけれど、子宮の底にペニスを打ち込まれると、括約筋はふにゅんと緩んでしまう。そのタイミングを逃さぬように叩き込まれる男根の穂先——！

ぐぶううう——ぐぼ、ぐぶううううっ！

「あっ——は、っ……っひ、く、は、ああああ……！」

長大なペニスを一息に、奥の奥まで突き込まれ、アリシアはぱくぱくと声もなく舌を突き出し身悶えた。その先端は、大腸にすら達していた——。

成熟できぬアリシアの幼い身体にとって、あまりに強烈な二穴責めであった。

「あおお、深い、お尻、深いっ……！ き、きついいいいい……」

「あはは、裏と表できつつきつ。凄い、きもちいいようっ、おねえちゃんっ！」

肛門肉が内部に押し込まれ、括約筋すら引きずられる。強烈な異物感にわななくアリシア、脳髓を焦がす恥辱の焰が、子宮をくつくつ煮立たせる。

みっちりとは広がってきたアナルはペニスをきゅつきゅと絞り上げ、その快楽にあやかは陶然としながらなおぐいぐいと二つの穴を責め立てる。直腸粘膜と膣粘膜とがぐりぐりと圧着されて、頭の中でチカチカと、目映い火花が散っていた。

「あう、中で、え、破れる、うう、中が——破れ——、あ、うう……っ」

あまりの苦しさに身体が硬直し、臓腑を圧迫される苦悶に打ち震える。肺腑が押し潰されたみたい息ができなくて、思考能力が低下していく。

縦に二つ並んだドーナツみたい丸く大きく拡張されて、伸びきってしまった二つ穴。溢れ出す愛液と腸汁が、ベッドの上のドレススカートにべつとりと染みついて、繰り返されるストロークになお飛沫を上げていく——。

にちやる、ぐちゅっごぼっ！ ずじゆるっ、ずっちゅ、ずじゆるっ、ずぼおう！

「や、お、やおお、突くな、おくうっ、突くなっ、辛いのだ、切ないのだあつ！」  
声をからして哀れに訴える少女の金色の瞳は潤み、熱い涙を流している。

——何よりも、アリシアが悶えるそのたびに、囚われた二人の口から迸る嬌声が心を抉

る。あまりの不甲斐なさに自らを切り刻んでやりたくなる——。

だが、その時。お腹の奥も奥、子宮の内部で発生した痛悦に、少女は砕けるほどに腰を引きつらせて悶絶した。

「——っ！ な、ひい……、んっ！」

一体、何が起こったのか——前穴を抉るペニスに、変化はないのだ。まるで、先だつてのヒルが、子宮の中に噛みついたかのような。

（——うあ。真逆、こやつ——）

身体中を、ぞおつと寒気が駆け抜ける。アリシアの、腔肉に潜り込もうとしていた肉ヒル。男根に挽き潰されたその肉が、子宮内部に流し込まれて再生したのだ。

子を産み育てるはずの子宮内に肉ヒルがいるという、あり得ぬ現実がおぞましい。

狭苦しい小袋に押し込まれた肉ヒルが、痲癩を起こしそこいらに噛みつく。

「ふきやつ、い、痛、やああつ、ひあああつ！ あう、うおおあうつ」

過敏すぎる肉壺の中を噛みつかれ、子宮を打ちのめす痛みにもアリシアは金色の髪を振り乱す。お腹の中にいるだけで、たまらない嫌悪感を覚えるというのに、その内部を噛まれるなどと——想像すらできなかつた。

「嘔むな、そんな、大事なところ……嘔むでないッ……！ う、うぐうっ！」

ズグン！ と、腹腔を押し潰す衝撃に息が詰まる。あやかの一穴責めとて休んでいるわ

けではなく、花唇と肛門にくわえた棒キャンディーが少女の未成熟な身体を貫くたびに、きゅんきゅんと下腹部が切なく引きつる。

子宮の中のヒルもおかまいなしに繰り返される、強烈な前後運動に、さながら銛もりに撃たれた魚のようにのたうち悶えるアリシア。

愛らしかった顔は、被虐の涙と鼻水でべとべとで、雪のような白い肌は桃色に染まってしまう。ゴスロリドレスは淫汁に濡れそぼり、白いニーソックスもびちゃびちゃで、肌の色を透過させてしまっている。ぷるぷると——黒いパンプスを震わせて、苦悦に苛まれるアリシアに、あの小生意気な少女の面影などなかった。

「お、ごおう、はおおお……、ぐいいあ、お、はぐううううああつ……」

吐き出す言葉も意味不明、痛みを、苦しみすらを押し流す、被虐の快楽が肉唇から大量の蜜汁をぶじゅると溢れ出させる。

（こな——！　こな、おかしくなるっ、おかしくなるうううっ！）

啜り泣きは甘く、吐き出す息は白い。艶めかしく蠢くヒップは、むしる肛肉を抉る男根をより貪欲に求めるような動きにも見えて。

「ふふ、あはは。お姉ちゃん、やつぱり……こんなにも、エッチで……」

「——！　否、違う、我は、我はっ……！　ぐ、ひっ、はあああああああ〜」

否定しようとした声は悲鳴と変わり迸る。アリシアの、肛門を埋め尽くす肉ペニス。そ

れがお腹の中で伸びていく——！ ずるずると、腸をこじ開けながら奥へ奥へと潜り込んでいく触手ペニスに、臓腑が沸騰する。

「ぐ、おほ……、な、お、深い、いい……そんなに、い、いい……」

熱い、ただひたすらに熱い。結腸を、大腸を、小腸を、その全てを肉詰めにされていく感触は、もはや爆発としかたとえられぬ熱い衝撃であった。腸粘膜を抉り抜く触手は果たして何メートルに及ぶのだろうか、痛ましいほどに悶絶するアリシアの腹腔は、ジェシカのそれと等しくぼこりぼこりとのたくつていた。

「あひいい、止め、やめよ、——くれつ、く、い、ひぐう、きついいっ！」

「ふにゅ、くひい！ アリシア、アリシアあつ！ きゅ、ふきゅうううっ！」

激しいヘッドバンギングをかまし、腸肉責めにのたうつジェシカの苦悶が、そのまま自分の身体に伝わってくるかのようだ。

(ジェシカっ……、こんな、こんなにもっ……！ ああっ……！)

あの少女はこれほどの——凄まじい肛肉責めを受け続けていたのか。

巨大な異物感に脳髓が白熱する。まるで、腸そのものが別の生き物と化したかのように腹腔の内で蠢いている——アリシアの腹はもはや一つの肉壺と化して、その内で暴れ回る軟体動物に器を拡張されていくのみであった。

甘い——甘い甘い、苦痛。身体中を駆け巡る、悦楽の電流。



目玉の裏で火花が散っている。耳の奥で何かが呻いている。

「ぐぐうう、ぐぼおっ！　ぐぶ、ぐぶう、ぐぶぐぶううううっ！」

「ひぐうひ、激しい、激しいっ、あやか、やめっ……あやかあああっ！」

アリシアの、二つ穴への蹂躪は——リオラの苦悶を偲しのばせる。

「あぐうう、前も、後ろもっ……、こんなに、なんてっ、深すぎますっ……、くうっ、感じてしまう感じてしまうっ……、う、うあああああ……っ！」

乱れに乱れた黒髪を振り乱し、たまらぬ肉悦に、それでもなんとか耐えようと唇を噛むリオラ。しかし、腰回りにみっちりとはりついた触手スカートはその二つの穴を奥まで突き刺して、ぐちゆるぐちゆると激しい肉音を響かせている。

焼けついた内壁を抉り子宮を押し潰す肉ドリル、拳が並んで二つは入るのではないかと思うほど拡張された肛門肉、そのそれぞれが彼女を責め立てて、苛烈なまでの淫辱に、背筋まで仰け反らせて、リオラは身悶おもんばかえてしまう。

だが——アリシアに、二人を慮おもんばかることなど許してはもらえない。

少女の腹腔を灼熱の快感が焦がす——！

ぐりぐり、ごりゆうっ、ぐっ、ごりごりごりいっ！

「ぐおおっ、はぎいっ！　や、めえっ、ふ、深いっ……、あひいひいひいっ！」

「あはは、お姉ちゃん、気持ちいいっ？　私はとーってもきもちいいようっ！」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

そなた  
「其方は真の地獄を…  
見た事があるか？」

可憐なゴスロリ・ヴァンパイア少女と、  
クールなレディ・ハンターが、  
都会の夜を駆け抜ける!!  
過酷な運命に翻弄されながらも、  
絆だけを頼りに闘い続ける。  
宿命のバトル・ロマン!



隔月刊  
コミックヴァルキリーで  
大好評連載中!

# BLANGEL

ブ ラ ン ジ エ ル



渡瀬行人

1



発行◎株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 3F 3Dコクビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208



最新情報は公式サイトにて

[www.comic-valkyrie.com/](http://www.comic-valkyrie.com/)

仙獄学園戦姫

ノブナガツ! comic



信長が、秀吉が、義元が、エツチにバトルにと漫画で大活躍！  
もうひとつの『仙獄学園戦姫ノブナガツ!』がここにある!!

# 待たせたら

毎月中旬  
発売!!

18歳未満の方は  
購入できません

18

漫画：老眼  
原作：斐之嘉和  
キャラクター原案：SAIPACO

戦うヒロインが屈服させられちゃうアンソロジーコミックス  
『闘神艶戯』偶数号にて連載中!

編集・発行 キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコビル TEL:03-3555-3431 (販売) FAX:03-3551-1208

<http://ktcom.jp/>

# あとみっく文庫最新刊

ちょっと大人のライトノベル / 毎月下旬ぞくぞく刊行中!! 定価 / 690円(税込)



全国書店で  
好評  
発売中



「…藤田君は責任取るべき」  
睦月への想いに身を焦がすマキナ  
彼女は夜の教室で……!?

思春期なアダム3 一人泣きの子猫

「小説…さかき傘 / 挿絵…天海雪乃



全国書店で  
好評  
発売中



「当方Mドレイ希望」  
魔界最強のプリンセスがドレイ志願!?

不死の吸血姫がDSのご主人様を募集  
しているようです

「小説…酒井仁 / 挿絵…にのこ

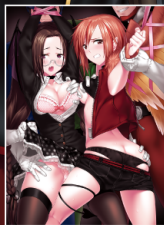


女幹部メル様の  
セカイ征服計画!

「小説…高岡智空 / 挿絵…鈴原依縫

全国書店で  
好評  
発売中

悪の秘密結社vs正義のヒーロー  
イケない戦いの記録!



既刊LINEUP ● 仙聖字態戦姫 / ブナガツ ①～③  
● 純魔 / 帝都少女探偵団 赤い謀略を撃て!  
● BLANGEL 輪になりに語る悪者の夜

● 借金お嬢小姐 ①～③  
● プリンセスリバーシ! 交錯する美姫と魔姫  
● 無敵の短剣士がSMに目覚めたようです

● ビルグリムメイデン ①～②  
● 歌組後らい節 / カースイーター-1  
● 魔海少女ルレイ・エル



# 仙獄学艶戦姫ノブナガツ!

第一次水着大戦

超能力者の少年少女たちが集う特殊な学園——西開学園、北宮学園、聖ジョウント学園。それぞれが仙獄島の覇権を求め、ちょっとHな三つ巴バトルの幕が開ける!! 平和なはずのミスコン勝負は、暗殺騒動が起きたり水着美少女が縄で緊縛されたり触手生物が現れたりで、とんでもない方向に進んで——!?

小説●**斐芝嘉和**  
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で  
**好評  
発売中**

# 仙獄学艶戦姫ノブナガツ! 弐

北宮学園生徒会長選挙戦

絶対的な権力を誇る北宮学園の生徒会長の座を競い、義元、氏康、晴信ら北宮三大美女はもちろんのこと、長尾く美姫)景虎、宇佐美く奈々)定満といった新ヒロインも加わり、エッチにバトルを繰り広げる!! 敗北したヒロインは勝者の奴隷に!?

小説●**斐芝嘉和**  
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で  
**好評  
発売中**



**仙獄学艶戦姫ノブナガツ!**

信玄、出陣!

北宮学園の生徒会長選挙戦も大詰め。肉欲に堕ちた義元と氏康を従えた景虎は、更なる戦力の拡大を図る。そんな中、信玄は元凶である按針を倒そうと信長に協力を求め、聖ジョウントのエリザは封印された化け物を発見する。様々な思惑が交錯する物語は佳境を迎え、信長は姦落の危機に陥るのだが!?

小説●**斐芝嘉和**  
挿絵●**SAIPACo.**



全国書店で  
**好評  
発売中**

**BLANGEL**

輪になりて踊る患者の夜

月下の街を紅に染め上げる、鮮血のサスペンスアクションの幕が上がる! 吸血姫アリシアは異形の生物「被験体」の影を追って戦い続けるが、予想もしない反撃に遭って虜囚の辱めに晒されてしまう!! 『隔月刊コミックヴァルキリー』の長期連載人気漫画が待望の小説化!

小説●**夜士郎**  
原作・挿絵●**渡瀬行人**



全国書店で  
**好評  
発売中**



あとみっく文庫

既刊情報

## 思春期なアダム

謎の少年ルシアの手で“蛇眼”の力に覚醒した藤田陸月。世界の半分を支配する秘密を秘めた彼をめぐり、天使と悪魔そして人間による争奪戦が始まった！ごく普通の少年の日常は一変し、美少女天使のエンジュや憧れの同級生伊部草マキナまで巻き込み、激しくそしてエッチに胎動する！

小説●さかき傘  
挿絵●天海雪乃



全国書店で  
好評  
発売中

## 思春期なアダム 2

背後をならう者

「世界の半分を支配する力」を秘めた“蛇眼”の持ち主として、天使たちに保護されたごく普通の少年、陸月。それでも普段通りの学園生活を送る彼の前に、新たな刺客が現れる…。天使・悪魔・人間の三つどもえのバトルはより過熱！“蛇眼”をめぐり迫り来る美女に美少女&美少年(!?)たちの誘惑で、陸月も新たな局面に…?

小説●さかき傘  
挿絵●天海雪乃



全国書店で  
好評  
発売中

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトで <http://ktcom.jp/>



## 借金お嬢クリス

42兆円耳を揃えて返してやりますわ

異世界の住人・ジグレットの奸計で父を失い、突如無一文となった令嬢クリス。なんとその借金額は42兆円! クリスは借金取り立てに現れた武装精霊ガーランドの力を借り、ジグレットへ借金返済の戦いを挑むことに! 果たして、傲岸不遜な令嬢はセレブな日常を取り戻し、己の貞操を守ることができるのか!?

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で  
好評  
発売中

## 借金お嬢クリス2

42兆円踏み倒してやりますわ

セレブから無一文に転落したクリスは、借金を返すために今日もバイト&バトル!? 水着コンテストで痴態を晒し、工事現場で肉体労働&ガーランドからの肉体調教と、八面六臂の活躍(?)に加え、ライバルのロリ令嬢、サキも加わり、エッチ&借金バトルはより熱く燃え上がる!

小説●筑摩十幸

挿絵●了藤誠仁

全国書店で  
好評  
発売中



# コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

## ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

## 発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



# 電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。

# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!  
来かねる場合がございます。お問い合わせはメールでも手紙ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!

**VALKYRIE**



<http://www.comic-alkyrie.com/>

**cranberry**



<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**  
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元  
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!